

岩手医科大学歯学会第36回例会抄録

日時：平成5年6月26日（土）午後1時30分

会場：岩手医科大学歯学部4階講堂

演題1. 本学口腔病理学教室における病理組織検査の集計——平成4年度の集計——

○佐藤 方信, 藤井 佳人, 佐藤 泰生

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

我々の教室で平成4年度（1992年度）にとり扱った病理組織検査について種々の観点から集計し、若干の考察を加えてその結果を報告した。

この年度の検査件数は513件（男250, 女263）で、月別には1月が42件, 2月が39件, 3月が43件, 4月が41件, 5月が51件, 6月が54件, 7月が53件, 8月が35件, 9月が34件, 10月が48件, 11月が33件, 12月が40件であった。症例（356例, 男169, 女187）を年代別にみると50歳代79例, 60歳代72例, 40歳代52例, 30歳代36例, 10歳代34例, 20歳代31例, 70歳代26例, 9歳以下18例, 80歳代7例, 90歳代1例であった。歯原性腫瘍ではエナメル上皮腫4例, 歯牙腫4例, セメント質腫4例であった。非歯原性の良性腫瘍ないし腫瘍状病変では乳頭腫10例, 線維腫（線維性ポリープ）8例, 血管腫3例, リンパ管腫2例, 過角化症（白板症）11例, 唾液腺の多形性腺腫が2例, 色素性母斑3例, 骨腫（外骨症）3例, 上皮性異形成4例, 骨の線維性異形成2例, 黄色腫1例, 神経腫1例で、悪性のものでは扁平上皮癌36例（男27, 女9）, 悪性黒色腫2例, 粘表皮癌1例, 腺癌1例, 腺様嚢胞癌1例であった。歯原性嚢胞では歯根嚢胞30例, 原始性嚢胞14例, 含歯性嚢胞6例であり、非歯原性では切歯管嚢胞3例, 術後性上顎嚢胞34例, 粘液瘤（粘液嚢胞）29例, 組織診断不能の嚢胞11例であった。炎症性病変およびその他の病変では歯根肉芽腫3例, 慢性過形成性歯肉炎（エプーリス）4例, 刺激性線維腫5例, 唾液腺炎（慢性）5例, アスペルギルス症1例, 放線菌症2例, 扁平苔癬9例, 上顎洞炎3例, 骨髄（骨）炎5例, アマルガム刺青1例, シェグレン症候群8例, ジランチン歯肉炎1例, 慢性炎症性（肉芽, 潰瘍）組織49例, その他30例であった。発生部位別には扁平上皮癌は舌12例, 歯肉10例, 口底6例,

頬粘膜4例, 口蓋2例, 上顎洞2例であった。乳頭腫は歯肉4例, 口蓋と舌が各々2例, 頬粘膜と口底が各々1例で、線維腫（線維性ポリープ）では舌4例, 頬粘膜3例, 歯肉1例であり、過角化症（白板症）は歯肉6例, 舌2例, 口蓋2例, 口底1例であった。

演題2. 年代別新来患者数の年次推移と現在歯数について

○戸塚 盛雄, 小川 光一, 福田 容子

岩手医科大学歯学部歯科予診室

80歳で20本の歯を残すことを成人歯科保健の目標として、1989年厚生省は8020運動を提唱している。今回、1983～1992年の10年間に岩手医大歯学部付属病院の新来患者を対象に、年代別患者数の年次推移と現在歯数について調査した。年間の新患総数では、男性は最低2345名, 最高2752名で平均約2500名であり、女性は、最低2931名, 最高3291名で平均約3000名で、年間の新来患者総数は10年間ほぼ一定していた。1年間の新来患者総数を100として、年代別新来患者数において、毎年30歳未満の患者が約50%, 30歳以上が約50%で、10年間ほぼ同じ比率であった。一方、60歳以上の患者の比率は、1983年、60歳代402名（7.2%）, 70歳代169名（3.0%）, 80歳以上が27名（0.5%）, 60歳以上の患者数は計598名（10.7%）であったが、1992年では60歳代591名（10.9%）, 70歳代224名（4.1%）, 80歳以上が62名（1.1%）であり、その内90歳以上が5名含まれている。60歳以上の年代において、いずれも増加しており、60歳以上は計877名（16.1%）となり、1983年時の約1.5倍と増加していた。

次に残根を含め現在歯数について検討した。1983年には50歳代の平均現在歯数は18.4歯, 60歳代：12.5歯, 70歳代：9.3歯, 80歳代：4.8歯であったが、1992年には50歳代：21.3歯, 60歳代：15.9歯, 70歳代：10.0歯, 80歳代：5.0歯であり、50歳以上の年代において平均現在歯数がいずれも増加していた。また全て